

連合神奈川主催 「教育を語る県民のつどい」



2017年9月5日(火)18時30分よりワークピア横浜にて、連合神奈川主催の「教育語る県民のつどい」に運輸労連神奈川県連から3名(高橋、磯崎、名張)が出席しました。

冒頭、主催者を代表して連合神奈川の林事務局長より「教育が真に未来への投資であるという考えから、教育諸課題を話し合う場としてこの教育を語る県民のつどいを実施してきた。今回で13回目の開催となり、今日はこども食堂の取り組みについて様々な角度から考えて頂きたい」と挨拶されました。

い」と挨拶されました。

今回の講演のテーマでも「子ども食堂」については始めて耳にする言葉でした。子どもが一人でも利用でき、地域の方たちが無料あるいは少額で食事を提供する「子ども食堂」。運営の多くはボランティアや寄付によって支えられ、その数は全国ですでに300カ所を超えとも言われています。孤食や子どもの貧困、さらには関係性の貧困がメディアで多く取り上げられる中、そうした課題を“自分ゴト”として捉え、地域で「食」を通じた居場所づくりに取り組む人が今増えているとのことです。また、講師の米田さんは「子どもの貧困には経済的貧困・関係性の貧困・



経験の貧困の3つがあり、家族や地域の人たちが子供にかかる時間が昔よりも減っている」と経済的な貧困ではなく、家族や地域における関係性の貧困が社会的な問題になっていると述べられていました。特に最近の公園では、ボール遊びは禁止、騒いではいけない等と注意書きがされている一方、家でゲームしていると親からは外で遊びなさいと注意され、子どもの居場所が無くなっているということ。そういう社会や大人の対応に対し、子供の方が距離をとってしまっていると語られていました。

私は独身で子どももいない独り身ですが、子どもはその親だけに責任があるのでなく、その子どもを取り巻く周囲の大人たち全員に責任があるのだと強く感じる事が出来たセミナーでした。



『教育を語る県民のつどい』に参加して



主催者代表挨拶

連合神奈川事務局長 林 克己氏

連合神奈川中央委員会の政策制度要求提言の中で福祉のカテゴリにある子どもの貧困について、本年新規の政策となっている。

子どもが生きにくい日本になっており子どもの貧困も高い水準になっている。フードバンクを立ち上げ、社会貢献活動の一貫として取り組んでいきます。と挨拶があった。

子どもの未来サポートオフィス代表 米田 佐知子氏

冒頭に講師である米田佐知子氏がプロフィールを話され、子どもの貧困の現状について説明がありました。子どもにアンケートをとった所、自分の将来に希望を持ってないという回答があった。その回答に比例して15-24歳の死因第1位は自死となっており、高校生・大学生に至っては年間971人で1日に3.6人という人数が内閣府から発表されている。子どもが育つのに必要な、多様な人との関わり合いが無くなってきた。近所つきあいに至っては時代と共に薄れている。そこで、新しいコミュニティとして『こども食堂』という、子どもが一人で来られる場所、無料・低額で食事が出る場所として、地域で取り組みが広がってきている。

多様な子どもの居場所づくり、子どもたちのセーフネットとして、地域に理解者を増やし、地域と広域、既存の活動、施設・支援とのつながりや連携を模索していきたいと話されました。

講演後に質疑応答があり、横浜市議会議員の麓 理恵（ふもと りえ）議員より、ご自身が携わっている「こども食堂」の現状についての話がありました。

今回の米田佐知子氏が話された主な内容は、子どもを取り巻く状況と地域・「こども食堂」について・多様な子どもの居場所づくりについてのお話でした。講演を聞いて、日本は、子どもが生きにくい国になっているという事への驚きでした。

「こども食堂」は、顔見知りを増やして「子どもを気にかける大人」のつながりを作る活動という事なので、見かけたら覗いてみようと思いました。



記事：磯崎 律子